

# ＜風＞の表象

## —シェイクスピアと能—

磯 野 守 彦

### はじめに

江戸時代前期の日本絵師俵屋宗達の「風神雷神図屏風」。かれはこの屏風絵を描くにあたり、京都は蓮華王院本堂、通称三十三間堂（1164年建立）に安置された風神・雷神像のもとへ足を運んだという<sup>1</sup>。

この宗達の「風神雷神図」は後の尾形光琳によって、また現代では明治期の青井青邨によって模写され、変容を遂げながらも現代にまで息づいている。

さて、この三十三間堂の風神・雷神像はそのもとを辿れば、ギリシャ神話の風の神ボレアスに行き着くという。アレクサンドロス大王（前356－323年）の東方遠征によって伝えられたギリシャ文明が、東方の最果ての国日本にまでたどり着いたというわけである<sup>2</sup>。

本稿では、このように東西につながる＜風＞について、文学作品におけるその表象をシェイクスピアの『オセロー』、『リア王』、『テンペスト』、それに能『松風』と『羽衣』に探してみたい。

### 『オセロー』

愛する夫オセローに根拠のない疑いをかけられ、悲しみに沈みながらベッドにつくデズデモーナ。その時、突然戸を叩く音がする。

デズデモーナ あら！だれかしら、ノックをするのは？

エミリア 風ですよ。あれは。 （第4幕第3場）

むかし、自分の母の所にバーバラという小間使いがいて恋をした。ところが、その恋人は頭がおかしくなって彼女を捨ててしまった。バーバラは「柳の歌」

が好きで、それを歌いながら死んでいった。そんな昔のことが今デズデモーナの頭を離れない。窓を叩いたのは、ひょっとしたら、死神、そう、それに違いない。バーバラとその恋人の關係にデズデモーナは自分とオセローとの關係を重ね合わせて、自分の死を予感する。

『オセロー』はその副題として「ヴェニスのもア一人」と書かれているが、實際舞台となるのは、ヴェニスは第1幕のみで、第2幕以降最後まで舞台は地中海の東の果てにあるキプロス島におかれている。キプロス島は現在でもキプロス共和国（南側）と北キプロス・トルコ共和国というようにギリシャ系とトルコ系に分断されたいわば戦闘状態の国であるが、その歴史も戦いと縁の切れることのない島であった。現にオセローがヴェニスからキプロスに向かったのも当時支配下にあったこの島をトルコから守るためであった。

しかし、ギリシャ神話をひもといてみれば、この島こそ愛の女神ヴィーナスが西風ゼフュロスに優しく息を吹きつけられ流れ着いた島なのである。オセローとデズデモーナのこの島への到着はあらしの中での到着ではあるが、このヴィーナス神話をはずしては考えられない。

オセロー　おお、美しい兵士！

デズデモーナ　わたしのオセロー。

オセロー　驚きと喜びが同時にこの胸をおそってくる、

お前がここで待っていようとは。ああ、この嬉しさ！

嵐のあとにかならずこのようなやすらぎが訪れるなら、

風よ、死人の目をさますまで、吹きまくるがいい！（第2幕第1場）

このあとも、オセローの言葉には今の幸せと先への不安とを併せ持つような言葉が発せられる。

おれの魂はこの上なく満ちたりているので、これからの

はかりしれぬ生涯に、二度とこのような喜びが訪れるとは

どうしても考えられないのだ。（同）

オセローの言葉の底流を流れる不安通りにすぐそこに彼の今の幸せを覆そうとねらっている蛇がいる。

イアーゴー（傍白）ああ、調子が合っているようだな、いまのところは！  
だが今にその音色を狂わせてやる。忠実なイアーゴーの名にかけてな。  
（同）

イアーゴーはその名のとおり、二つの顔を持つ悪魔。主人公オセローに仕えたと見せかけて実は自分自身に仕えているのである。

つまり、やつの家来のように実はおれ自身の家来なのさ。  
……おれは見せかけのおれとはちがうんだ。（第1幕第1場）

ヴィーナスの島に繰り広げられるオセローとデズデモーナの悲劇は、イアーゴーの策略にまんまとのせられたオセローがデズデモーナを殺すことで終末を迎える。ひょんなことから仲違いしたオセローと副官キャシオーとの仲を取り持つことにのみ腐心する無垢なデズデモーナは自分に掛けられた罪を知ることもなくベッドでオセローを待つ。そして、冒頭に引用した場面となる。そこに吹く風はやさしいゼフュロスの西風ではない。ヴィーナスの愛の島は嫉妬と殺戮の島に変わってしまうのだ。一人の愛しすぎた男の悲しい物語である。

あなたがこの不幸な出来事を報告されるとき、  
ありのままの私をお伝えいただきたい、いささかもかばったり、  
あるいは悪意をまじえずに願いたい。つまり、  
愚かにではあるがあまりにも深く愛した男であった、  
容易に嫉妬にかられはせぬのに、たぶらかされて  
極度に乱心した男であった……そういう男であったと書いていただきたい。  
（第5幕第2場）

## 『リア王』

『リア王』第3幕第2場。愛情テストによって財産を分与するという愚行の結果、口のうまい姉娘二人に自分の財産を分け与えはしたものの、約束は果たされず、怒り狂って荒野に飛び出すリア王。猛烈な嵐が吹き、雷鳴のとどろくなか、リアは嵐に向かって呼びかける。

風よ、吹け、きさまの頬を吹き破るまで吹きまくれ！

雨よ、降れ、滝となり、龍巻きとなり、そびえ立つ

塔も、風見の鶏も、溺らせるまでふりかかれ！

稲妻よ、一瞬にして雷神の心を伝える硫黄の火よ、

柏の太木をまっぴたつに突ん裂く雷のさきふれよ、

わしの白髪を焼きこがせ！そして天地を揺るがす

雷よ、丸い地球が平らになるまで打ちのめせ！

いのちを生み出す自然の母胎をたたきつぶし、

恩知らずな人間を作り出す種を打ち碎け！

日本に伝わる風神雷神は、雨と風をつかさどり、五穀豊穡を大地にもたらす神々として信仰されていたとのことであるが、ここに見るまさに同じ風神雷神は大地を破壊し、自然を実りなき物とするものとして描かれている。それは、聖書ノアの箱船のイメージが関わっているということもあろうが、東西における風神雷神の違いが見えて面白い。

『リア王』におけるもう一つの＜風＞は第3幕とは対照的な小さな風である。それは、リアとコーディーリアとの和解もなり、しかし、ブリテン軍に絞め殺されたコーディーリアをリアが抱いて登場する最終場面におけるものである。

リア ……この娘は死んだ、土くれのように。

鏡を貸せ、息でその表が曇るか汚れるかすれば、

まだ、生きておるのだが。

……

この羽根が動く、生きておるぞ！ああ、もしも  
生きてさえいてくれれば、わしのなめた悲しみは  
すべてつぐなわれる。(第5幕第3場)

絞め殺された末娘コーディーリアの復活に最後の望みを掛けて、リアは祈るようにコーディーリアの生きている証、つまり息（小さな風）を求め続ける。リアの最後の言葉である。

これが見えるか？見ろ、この顔を、この唇を、  
見ろ、これを見ろ！（同）

コーディーリアが生き返ったかどうかは誰にもわからない。しかし、リアはコーディーリアの再生を幻のなかに見てこときれる。リアは最後にコーディーリアの口に小さな＜風＞を見たのである。それをリアの幻想だとして我々は否定しまい。リアはその幻想のなかになにに幸せにこの世を去ったのだ。大きな風のなかで狂ったリアの最期は小さな風を信じる幸せのなかで閉じられる。

### 『テンペスト』

ここに一編の新聞記事がある。それは「難破船から古代のお宝？」という見出しで、アメリカの海洋学者が「地中海のイタリアとチュニジアの間の深さ約800メートルの海底に8隻の難破船が沈んでいるのを見つけた」というものである。その「最も古いものは紀元前1世紀ごろのものと見られ、中からはつばや水差しなどが多数見つかり」、「古代ローマ人が、かなり沖合にも船を出して活発な交易を行っていた証拠として注目される」という。記事の最後には海洋学者の談話として「船は突然の大あらしで沈んだようだ。この海域もバミューダ三角水域のように危険なのかもしれない」とこの海域についてのコメントが紹介されている。

『テンペスト』は冒頭の大嵐といい、エアリエル（風の精）の登場といい、シェイクスピア作品の中ではもっとも大規模に＜風＞をテーマとした作品であ

る。場は地中海のある孤島に設定され、そこに住む魔法使いプロスペローが往年の復讐として、娘をチュニスへ嫁がせたナポリ王とプロスペローの弟で王位篡奪者現ミラノ公を乗せた船をその島へあらしを起こして引き寄せ、座礁させるところから物語がはじまる。

シェイクスピアはすでに大航海時代に入っていたにもかかわらず、その多くの作品の場を地中海に設定し、唯一アメリカ大陸に関係する物語としてこの『テンペスト』を書いたとされる。しかもその関係の仕方は、あくまでも間接的で、新大陸なる語は一度も使っていない。あくまでも地中海の物語として終始一貫しているのである。ただ、材源としての内容面から見て、当時のカリブ海での難破事件とか、登場人物キャリバンがカリブという語に似ているとかいうことで、地中海の物語の装いのもとに新大陸の物語を構成したと考えられ、また、最近のポストコロニアル批評の潮流の高まりとともに、プロスペローとキャリバンの関係を植民地主義者と原住民との関係で見、一気にその批評的人気をさらっている作品ではある。

しかし、逆にこういった考え方はできないであろうか？シェイクスピアはあくまでもこの作品をも地中海の物語としてのみ考えていた。そして、その作品創造のための材源として新大陸発見にまつわるさまざまな事件を使ったにすぎない。『テンペスト』はあくまでもキャリバンの悲劇ではなくて、プロスペローの復讐と許しの喜劇であると。これほどまでに、『テンペスト』＝ポストコロニアル劇という等式が常識化された現代においてこのような提案をすることは愚のそしりを免れないかもしれないが、地中海にもカリブのバミューダ三角水域のように危険な海域があるという記事を見て、あれほどまでに地中海にこだわったシェイクスピアが一つの作品のみ新大陸の作品を書いたと考えることに抵抗を感じるわたしには『テンペスト』もやはり地中海の劇であるということを再確認したいのである。

高桑みどりはその著『風のイコノロジー』において、古代ギリシャ人の考えた風の王アイオロスについてこのように述べている。

彼は風を閉じこめた袋を彼の領土であるシチーリアとイタリア本土の間

に散らばるアイオロス群島（イタリア語ではエオリ群島）の洞穴に隠して  
いて、ときとして海上にそれを解き放った。昔から地中海で一番風の激し  
いところは、この群島の中のリーパリという島の近くなので、そのことが  
ホメーロスの時代から皆にわかっていたらしい。(34)

このアイオロス群島のリーパリという島と新聞記事にある8隻もの船の沈ん  
でいた海域、さらには、シェイクスピアの『テンペスト』のプロスペローの島  
が一致するものかどうかは知るよしもないが、要するに、昔から地中海にもカ  
リブの魔の海域に似た場所があったということだけは確かなようである。

シェイクスピアは彼の劇作家人生を終えるにあたって、劇場、劇作家、俳優  
を島、魔法使い、エアリエル（それにキャリバン）になぞらえ、「間違い」に始  
まった彼の「あらし」のような人生を「許し」でもって閉じたかったのではない  
か。彼の眼中には新大陸はなかった。ルネサンス人としてのシェイクスピア  
の心のふるさは西の大西洋ではなく、あくまでも東の地中海にあったといえ  
よう。

### 『松風』

日本では＜風＞は和歌に詠まれることが多い。

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる（古今集秋  
上 藤原敏行）

は誰も知る名歌であろう。

さて、能『松風』は世阿弥の作とされ、汐を汲む海女のかつての愛人への思  
慕の情を秋の月を背景にうたった夢幻能の傑作である。

ところは須磨の浦。舞台には、夢幻能の常にあるように、旅の僧が登場し、  
札が打たれ短冊の掛けられた様子ありげな一本の松をみつける。僧は早速とこ  
ろの者にそのいわれを尋ねる。尋ねられた者は、この松はその昔、在原の行平  
の中納言と松風、村雨という姉妹の海女との間に交わされたかりそめの愛の証

の松であることを告げ、弔ってあげてください、と言って退場する。僧がお経を読み念仏を唱えているうちに秋の日は早くも夕暮れとなり、僧はこの浜の海女の塩屋で一夜を明かすことにする。

汐汲み女が二人、月の浜辺に登場し、不幸な身の上を嘆きつつ、汐を汲み、涙に暮れる。秋の月までもが、涙を誘う、と嘆きつつ、月の出とともに満ちてくる汐を汲み始める。汐を二つの桶に汲み分けてみると、空に浮かぶ月は一つなのに、桶に映る月の影は二つ、と喜んで重い汐汲み車を塩屋へ運ぶ。

旅の僧は帰ってきた女たちに一夜の宿を所望する。あまりに見苦しい塩屋にて宿をお貸しすることはできません、という女に、僧は出家の身なので見苦しいなどと言うことはいっこうに差し支えないことでもあります、といてついに宿を借りることとなる。

僧は浜にあった一本の松のことに話題を移し、聞くところによれば、松風、村雨という二人の海女のいわれのある松であるということなので、かりそめの縁ではあったが、お弔いをしておきました、という、二人の女は涙を流し始める。

わたしたちはその松風、村雨という二人の女の亡霊で今ここに姿を現してきたのです。そして、当時須磨に流されてきていた行平に見初められて、松風、村雨という名前までいただき、行平がここにおられた間その高貴な方と慣れ親しむ身となった次第を語る。3年が過ぎて行平は許されて都に帰ることになったが、お帰りになって程なくお亡くなりになったとお聞きしました。分不相応な恋をした罪深い須磨の海女の跡をどうぞ弔ってください、と懇願する。

恋の思いにすっかり思いも乱れてしまい、心は狂気になり、巳の日の祓いも役に立たず、神の助けもなく、はかない身の上なのです。行平は都へ帰るとき、ここでの暮らしの思い出として御立烏帽子と狩衣を残していったが、この形見を見るといっそう思慕の情は募るのです、と涙に暮れる毎日であることを僧に話す。松風はその行平の形見を身につけ物狂いの状態となり松を行平に見立てて寄り添おうとする。妹の村雨はいったんはこれを留めるが、やがて松風に同調する。待っていればいずれは帰って来るという行平の約束のはかなさに松風は「中の舞」「破の舞」を舞い、松風、村雨はあらためて僧に回向を頼み消えて



ゆく。

松に吹き来る、風も狂じて、須磨の高波、激しき夜すがら、妄執の夢に、見見ゆるなり、わが跡弔ひて、賜ひ給へ、暇申して、帰る波の音の、須磨の浦かけて、吹くや後の山おろし、関路の鳥も声々に、夢も跡なく夜も明けて、村雨と聞きし今朝見れば、松風ばかりや残るらん、松風ばかりや残るらん。(404)

ここに描かれているのは、秋の月の出る夜、海岸に生えた松に向かってある時は狂おしく、またあるときはそよそよと吹く風に、海女松風村雨の行平への恋慕の情を表象させた須磨の海辺の風景である。

### 『羽衣』

『松風』が秋の風情を歌った寂しい曲であるのに対し、『羽衣』は花の舞いあがる春を歌った明るい曲である。

春の朝、漁夫白竜が美保の松原に行く。のどかな春の松原に波が打ち寄せ、朝霞が立ちこめ、うっとりとするような眺めである。沖には釣り人の小舟が見える。

白竜が美保の松原にあがって景色を眺めていると、空からは花が降り、音楽が聞こえ、いい香りが一面に漂ってきた。ふと見ると松に美しい衣が掛かっている。白竜は家宝にでもしようとその衣を手に取り持ち帰ろうとする。すると、衣の持ち主が現れ、それは天人の羽衣というもので、それがなくては空をも飛べず、天上に帰ることもできない、と悲しむ。白竜は天人の悲しむ姿を哀れみ、天人の舞楽を舞ってくれるのならお返ししましょう、という。白竜は天人に衣を返し、天人はその衣を身につけ、のどかな春の風を受けながら、優美に舞を舞う。天人の舞により、この地上はまるで極楽世界のようにになる。舞を舞いおわると、天人はなおも舞いながら天上界へ帰って行くのであった。

有名な羽衣伝説を能に仕組んだ曲で、白竜の見つけた羽衣を返す、返さない、の争いはあるものの、全体として、おめでたいハッピー・エンディングの曲で

ある。吹く風は春の暖かな風、そこには『松風』に吹いているような冷たさ、悲しさはない。幸福の瞬間を＜風＞によって表象した一曲であるといえよう。

## 注

1. 「俵屋宗達「風神雷神図屏風」」『美の巨人たち』（2003年10月4日放送）。
2. 「神々の春かな旅」『アレクサンドロス大王と東西文明』第3話（DVD）紀伊國屋書店、2003年による。

## 参考文献

- アッリアノス『アレクサンドロス大王東征記』上下 岩波文庫、2005年  
『アレクサンドロス大王と東西文明』（DVD）紀伊國屋書店、2003年。  
小山弘志・佐藤健一郎 校注・訳『謡曲集①』小学館、1999年。  
シェイクスピア・ウィリアム『オセロー』小田島雄志訳、白水社、1983年。  
——『テンペスト』小田島雄志訳、白水社、1983年。  
——『リア王』小田島雄志訳、白水社、1993年。  
渋澤幸子『キプロス島歴史散歩』新潮社、2005年。  
「俵屋宗達「風神雷神図屏風」」『美の巨人たち』（2003年10月4日放送）  
2006/05/27<<http://www.tv-tokyo.co.jp/kyojin/picture/031004>>。  
『日本の美学』36（2003年）燈影社。  
半藤・荒川『風の名前 風の四季』平凡社、2001年。  
若桑みどり『風のイコノロジー』主婦の友社、1990年。